

鳥取県立バリアフリー美術館

所在地 <https://tottori-bfm.jp>

設置者 都道府県

指定施設／美術博物館



「鳥取県立バリアフリー美術館」

2023年グランドオープン

発表

障害のある作家たちの作品だけを集めたオンライン上の美術館「鳥取県立バリアフリー美術館」を設立した事業。県内の障害のある作家たちの作品を掘り起こし、美術館に行けない人たちのアクセシビリティの向上を図ることを目的に、「誰でも、いつでも、どこからでも鑑賞可能」というコンセプトを定めた。当初作品のアーカイブ化を目指していたが、ワーキンググループで議論を重ねオンライン美術館設立へと展開。都道府県立では全国初となる障害者アートに特化したオンライン美術館は、国内外から大きな反響があった。1年を経て、ワーキンググループを中心にさらなるブラッシュアップを目指している。

取材日 2023年12月26日

回答者 小泉陽一(鳥取県立バリアフリー美術館 鳥取県福祉保健部障がい福祉課)



「鳥取県立バリアフリー美術館」



美術館設立のきっかけや目的などを教えてください。

本美術館創立の背景として、鳥取県が障害者による文化芸術の推進に継続的に取り組んできたということがあります。

2014年に第14回全国障害者芸術・文化祭が鳥取県で開催されました。そのレガシーとして、翌2015年より「あいサポート・アートとっとり展」を毎年開催してきて、まもなく10回目を迎えます。これは、県内の障害者を対象に募集した文化芸術作品を一堂に展示するアートの展覧会です。これをきっかけに、県内で芸術文化活動に取り組んでいる施設、団体や個人とのつながりを作ることができました。それによって多くの作品を掘り起こしたり、活動支援補助金を提供したりすることにつながりました。また、鑑賞サポートという側面でも、県主催の文化祭や展示会だけでなく、民間のアートイベントについても鑑賞サポートに必要な経費を補助する仕組みをつくってきました。

そのような継続的な関わりのなかで私たちが気づいたのは、障害者によるアート制作の多くは福祉事業所の現場で行われており、専門人材がいない場合も多いということです。このためアートの価値が正しく評価されず、埋もれている作品が多数あります。こうした作品を正しく評価し、活用していくために、作品の掘り起こしとアーカイブ化が必要だと考えました。

その一方で、鳥取県は2022（令和4）年に施行された「障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律」（障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法）に基づき、障害者の情報アクセス先進県を目指しています。令和5年度には全国に先駆けて鳥

取県で成立した「手話言語条例」制定10周年を迎え、「第10回全国高校生手話パフォーマンス甲子園」を開催するほか、先ほどの鑑賞サポートの普及にも本格的に取り組んできました。

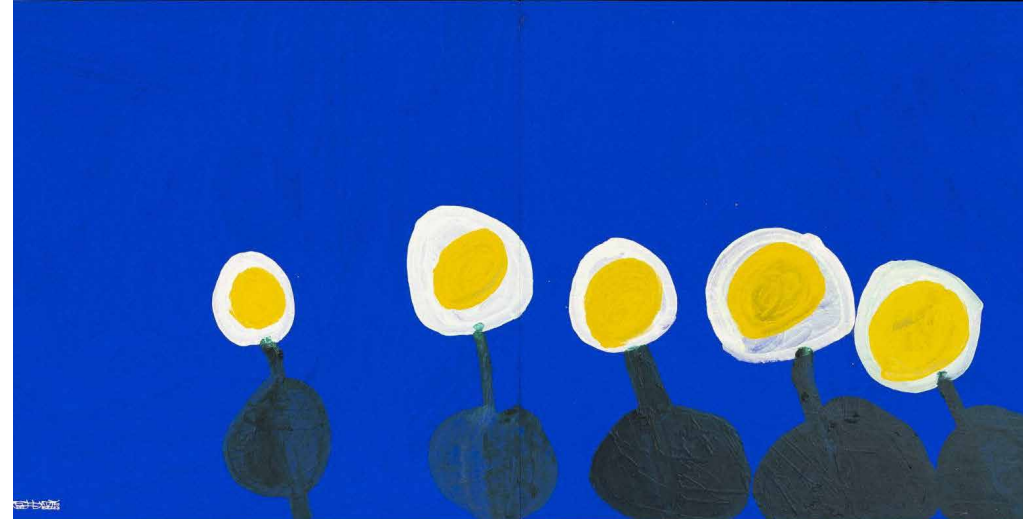
このアクセシビリティという観点からも、介助がなければ作品展等の会場に来られない人、外出が難しい人への配慮も含め、障害の有無に関わらず文化芸術を身近に感じ、そこからさまざまな感動や恩恵を受ける機会を拡大することが求められているのではないかと。また、障害者の作品を掘り起こし、アーカイブ化するにとどまらず、それをバーチャルな美術館という形で公開することにより、障害者の文化芸術へのアクセシビリティ向上を図ることができるのではないかと。そういった議論から、障害のある作家、そして鑑賞者、双方にとって開かれた美術館の創設を目指すことになりました。

どのようなプロセスで企画、実施しましたか？

障害者の作品の掘り起こし、アーカイブ化の議論から、オンライン美術館へと事業を展開しました。スタートは2022年7月1日です。

オンライン美術館創設という目標が定まったところで、「鳥取県立バリアフリー美術館創立事業ワーキンググループ」を結成し、検討会を3回（7/1、7/22、10/25）開催しました。ワーキンググループには、文化芸術活動に取り組む福祉事業所の職員、県内の芸術関係者、県立美術館の館長予定者など計10名の有識者が参画しています。そのなかで、バリアフリー美術館の構築方法、展示作品の選定などについて検討を行いました。

ワーキンググループが定めた選定基準をもとに、私たち障がい福祉課では調査を開始しました。アンケートを実施し、県内で創作活動を「現在実施している」または「過去に実施していた」施設や個人、計88件をリスト化しました。その上で過去の活動歴などから2022年度の調査対象を55件に絞り、作家や担当職員へのヒアリングを働きかけたうえで、実際に作品の調査がで



「スイセン」(福井将宏) 2016 年頃 木、アクリル絵の具 90.0 × 182.0cm

きたのは23件でした。

限られた調査期間であったことやコロナ禍における制限も重なり十分な調査には至っていません。今後も継続して、調査・記録を行い、さらなる掘り起こしをしていきたいと思っています。

また、実装するバリアフリー機能については、障害当事者の方々にヒアリングを行いました。身体障害者協会や視覚障害者協会、聴覚障害者協会など8団体の施設を訪問し、ご意見をうかがいました。それらは、作品説明の文字の大きさ、背景や文字色、自動再生機能（自動で作品鑑賞が可能）、音声及び手話での説明機能として、バリアフリー美術館に反映しています。

連携している団体、有識者について教えてください。

鳥取県では、障害者の文化芸術を推進するにあたり「鳥取県障がい者芸術・文化活動推進会議」という組織を結成し、各種障害者団体や県内の文化芸術の専門家、さらには県庁の文化政策課や博物館職員など20名が参画しています。今回の取組も、彼らとの連携により進めることができました。

また、鳥取県は「あいサポート・アートセンター」という障害者文化芸術活

動拠点を設置しています。障害のある人たちの創作活動を支援し、当事者やご家族などの相談にも対応しているセンターです。本美術館の運営も、県から同センターに委託しており、都度、県とセンターで協議しながら実施しています。公式サイトでの運営なども同センターが行なっています。

サイト制作はどのような体制で行いましたか？

制作会社については、プロポーザル調達をかけて提案型の入札を行い、審査会を開いて発注先を決定しました。美術館の構成を提案してもらい、一番優秀だった企画を採用しました。その協力会社は、障害者の自立支援と企業の人材開発を組合せたプロジェクトなど、テクノロジーによって障害者の作品に付加価値をつけ、製品化するさまざまな取組を行なっており、また、オンライン美術館を手がけた実績もありました。現在もこのサイトの保守管理を担っていただいています。

実施するにあたり、 どのようなご苦労がありましたか？

事業を実施するうえで、私たちが特に重要だと考えたのは、「誰でも、いつでも、どこからでも鑑賞可能」というコンセプトの実現です。この点は、制作サイドとも共有して進めてきました。当初はメタバースを活用するという案もありました。新規性があり、ワクワク感もあると思いますが、「誰でも、いつでも、どこからでも」というコンセプトからは外れると判断しました。メタバースの操作性は誰にとっても簡単というわけではありません。また、通信環境にも大きく左右されます。ある程度の通信環境でサクサク観られるということが重要で、そこから要件が定まっていきました。最終的にはグーグルビューのように、鑑賞者が画面の中を進んでいく形になっています。

障害の有無や年齢、通信環境に関わらず、誰でも操作しやすく、安定し



写真上) 常設展示室1
写真右) 5つの展示室のテーマと全体図

た動作で閲覧できるよう、360°静止画合成として、デザインもシンプルなものにしました。

そこに投影されるさまざまな影（親子や車椅子の鑑賞者など）によって、作品のサイズがイメージできるような工夫を凝らしています。

展示されている作品について教えてください。

常設展と企画展という二つの構成は、ワーキンググループの話し合いの中で決まりました。常設展には、当初アーカイブ化の目的であった、県内の施設から掘り起こした作品を展示しています。企画展は、「あいサポート・アートとっとり展」の入賞作品などを展示し、年に数回入れ替えていくイメージです。



「花」(木村広美) 2020年 紙、ペン、色鉛筆 98.5×128.5cm

作品数は、それぞれ55作品ずつ、最大110点展示できます。

ワーキンググループで定めた作品選定の考え方は、個性的でオリジナリティのある作品。平面や立体といったジャンル、障害の種別は問わないといったことです。なお、当館では作品の画像を収蔵していますが、オリジナルの作品自体の収蔵は行っていません。

「誰でも、いつでも、どこからでも鑑賞可能」というコンセプトにこだわり、ワーキンググループや制作会社ともそれを共有しながら、一つひとつ積み上げるように作ってきたので、途中から大きな変更などはなく、スムーズに進められたと思っています。

2月28日のオープン後、どのような反響がありましたか？

我々が思っていた以上に多くのアクセスがありました。特に海外からの閲覧が多かったことに驚きました。また、都道府県からの問い合わせも多く、オンライン美術館に興味がある自治体が少なくないことをあらためて知りました。

作品が展示されている作家の方々からは「たくさんの人に観てもらえてうれしい」という声が届いています。作家の創作への意欲や社会参加の促進につながるなど、さまざまな面で効果のあった事業だと感じています。

本美術館設立の目的の一つに、障害のある人の作品の活用促進ということでしたが、今年度から、本美術館の作品を活用して、「山陰ご当地フォントプロジェクト」という障害がある人の作品をパターン化して収益につなげる取組を県内のデザイナーと協力して進行中です。今後も活用が広がることで、障害のある人のアート作品が地域の中に自然に溶け込み、新たな交流やつながりを創出することを期待しています。

アクセシビリティについては、福祉施設などを訪問し、障害のある人たちに実際にバリアフリー美術館を体験していただいてからヒアリングを行うなど、今年度も継続的に検証を行っています。また、今後、どの程度の作品を収蔵するべきなのかも考える必要があります。開館1年を経て、ワーキンググループで振り返りを行い、それ以外の課題についても議論する予定です。現在の形が完成形ではなく、今後もブラッシュアップを図っていきます。

他の施設へのアドバイスをお願いします。

当初アーカイブ化からスタートして、オンライン美術館に展開した本プロジェクトですが、鑑賞者のアンケートなどを見ると、美術館という場によって価値づけされた作品という捉え方をされていると思います。そのことが作家本人の自信や社会参加にもつながり、とてもよかったと感じています。

実際にオンライン美術館をつくって感じたことは、障害の当事者の方々のご意見をしっかり聞いて、それを反映してつくることが大切であるということです。企画や構成についてもそうですが、特に操作性や視認性など細かい部分も一つひとつ確かめながら、積み上げてつくっていくと、コンセプトにブレのない事業ができるのではないかと思います。